

ゲー・テ著「イタリア紀行(上)」岩波文庫、岩波書店 1942 年月 1 日刊を読む

### 〈パドヴァ〉

#### 〈パドヴァ大学〉

- 面大な楕円形の場所を囲んで、塑像が林立している。
- この地で教育を受けたり、または、教育を受けたりしたことのある名士は、一人残らずここに飾られる。
- この土地の人たるとを問わず何人にも、ある人物の功績と、パドヴァ大学在籍とが証明されれば、すぐにでもそうした同郷人ないし近親者のために、一定の大きさの立像を立てることが許されるのである。

#### 〈エレミット派の教会〉

(1) ○ マンテニヤの絵を見た。

- 近古の画家の中で、私の驚嘆した一人である。
- その画面には、何という鋭敏確実な現実性が溢れ出ていることであろう！

(2) ○ この現実性たるや、まったく真実にして、

- 決してごまかしや当て込み、さては、徒に創造力に訴えるようなことはなく、
- 「朴直」「清純」「明解」「周密」「誠実」「纖細」「如実」でありながら、
- 同時に、「一脈の峻厳」「熱誠」「苦渋」の影を宿しており、
- 後代の画家が、ここから出発したものであろうことは、私が、ティアノの絵に接して、認められたところである。

(3) ○ そして、やがて、彼らの

- 「雄渾なる天才」「活潑なる資性」は、
- 「先人の精神に啓発」され、「先人の力に陶冶」されて、
- 「次第、次第に高く向上」し、「地上から舞い上がって」、
- 「天上」の、しかも「真実の姿態」を描出ししうるに至ったのである。

○ 野蛮時代以降の美術は、このようにして発達してきたのである。

#### 〈コメント〉

- (1) 「学びて時にこれを習う、また、よろこばしからずや。友あり、遠方より来る、また樂しからずや」(論語)志を同じくすると友達とともに、先生から学ぶ姿こそ美しいものはありません。パドヴァ大学の広場の立像を一度見てみたく思います。
- (2) ゲー・テのこのエッセイから、芸術作品の鑑賞の仕方、作成の心構え、文明への接し方数多く学ぶことができます。ゲー・テの「イタリア紀行」、是非、一度、ゆっくりお読みください。
- (3) 松尾芭蕉の「奥の細道」も是非、ゆっくり、お読みください。受験勉強の合間に、たとえ 30 分、1 時間でもいいから、読みたい本や、読みかけの本を、じっくり、著者と「時空を超えた対話」を積み重ねながら、最後のページまで、行ったり来たりしながら、読むことも、「人格形成」「人格の基礎」をつくるうえで、意味があると考えます。是非、お薦めください。